見聞集　下

9 尹 5
2230
2 止

り

見聞集巻之八目録

寿庵と云医師の事　宗順たはけ者を笑ふ事
世上入道無き者を知る事　江戸町中吾妻坊主共の事
梅庵生臭坊主なる事　江戸の境地世に紀したる事
関東海中に鯨住む事　江戸町大鏡込の事
村田氏年寄あるすまひけの事
雲龍こゝろしきの事　悪きする子供の噂の事

巻之九

江戸町衆花見の箱かつきたる事　茶歌弓鞠を御法度たる事
慈悲法印元日城悦ばざる事　武家にて下総国さすらひの事
半蔵年貢城探る事　年物終る噂の事

新福寺徳国師道の事　夢佛の銭取る事
唐船にて死する事　橋に笑石ある事
於女とも江戸を拂はるる事

巻之十

浄和軒勧進日本てつの事　嵯峨云庭取に名志ある事
旧き東国一見の事付武名流家かくしの事
蓬攻より梅をもらふ事　神田大塚より川人出生の事
江戸ちまた徒の事　江戸大橋毎日刀市立つ事
色のあげくの城志ざす事　湯島天神開帳所の事
花の縁を結ぶ事　元く小者銭をとる事

見聞集巻之八

寿庵と申す医師の事

見しハ今江戸所に寿庵といふ者あり生得医師脈
をとることは妙なるの事西寒の中より候を直しきる
道ありけるに十七八ハ八ハ徳ありける寿庵の業を聞し
用ひる生業師らと諸人信服す其識より再展しなハ
天下の名医江戸に数多ありといへども脈を取て寿庵
のやうなる寺持をいふ人なしといへば之なる人必ず寿庵
生れ立より今迄のことを聞よく知たる人いろは文字斗
を読て書を見たることもなし医学ハなしけれども世に名を
の術治ありけるげに仏神ならではいふ事を持ぬ

是は弁特を云とかや又かきゝ剃をそへては其身の一代をかん
かへ我の内の節を見ては一生涯を占ふ人多し万
たれのまめ也や思ひつゝんとて是人家々文陰陽師とて
吉凶の占をなす事唐国よりは部公節日本にては晴明
とまふすもの人の名を用て深秘の義を工道よく学びたる
もかまはは何事も書にて調るか如し然も末代にまとひて愚人様
ねり盛しに

宗祇たてたる故を説事

其しは宗祇由来宗祇といふは宗の人望人より云ける根は宗長は
宗よりも見てはいよく国より出て第一かりきゝ人形ふくく
なるに云筆を自ら行くならではなすきよろしてはひとくなすて

かくる事をいふまより跡さきなし拾遺にもあるとかや
なされたる人のまへは志をくみくて物はいひかけ縁せら
れ又宗祇はたら思念はとゝまり出来ぬ白故せられに
何とかくもたまたる故をくて云せんに宗長付る宗長は生国
駿河の人なれども都人とおもふくりし志くてこそてるなる
ふる故行とてふんとよふしも実にてふかりなすゆけ
又都をいひ出るを云てそおりしりれ共に付ても気に
あれしかたの故さん事再に境地なしに人王五十代桓武天皇
御宇十三年甲戌十月廿二日に山城の国葛野の郡に都を
うつされたり男女刀ふくみちざんぎりに宗筆やうやしく
有りとよ宗長あたを歩みあたかなる都人のふうをみやこ

初は学者の経傳昔ゟ今に至迄仁義礼智信を備るとし
文武の二道能たしなミて民百姓に至迄筆の道を学ひ
文学にあかるけれバ詞をハあやしき夜ゟもきこえて是迄沢山に咲たる文
字をんやまらされたる義をんやまらくしらぬく却く他をなん
ぜらる文字は君道の愚と思なくしてよく学ばね学道は
といふ事のあるとされ志からんや されバ浮世物語にもよくば
ひてとし書れしハよ縁つゞひてなりなすべくるれなきといへるを
三筆んハ其の字と云事ゟ法しきるよりは筆しきとも筆とつ
ともいへり

世話入道世話を知る事

されは今世話と云ふ人学するに浮世を聚とは見て云ふ有文哉

朝に佛法傳ると云るあり古事は我国ハ天地の道に廣
められたる事も唱る仏法伝り来りまめらうて

学所にあつく西学坊云ける者の

是ハ大に西学坊とよく抖擻乃り人曽我の説法師をめぐら
しかば口の間に出まとなさる事ゆへ是をうんてすゝむうちな
たまり浮世物のおもしろくひきて精あつく流せハそれに大事を付て
口のうちあつく成まして八ツ過るもあそひてまつ後に有つるく
曲三昧をせんとて中懸る所清久合ゟ夜の提所まへくまゝ
桶をいそき我家にあとりからの八ツ時より明日の八ツ時迄三へ
しいたる節其故大風吹しかてしく大雨志ちもうゝもと
流し我をも吹くるゝ沢山の大風雨なりけり云くへんとて

天下波旬もかゝる所をうけて寂よらのなき色と皆人云し
殊に文いふはなる宗匠を見おどさんと向の
家の戸をたゝき宗をあけて見はやりしに筈人見なりし
ころハまて多稀をいふきて言へり事明くこれを大きなる
る所謂をとばすと云者しう筋すもぬ水生見よもうんせし
其すこ切かのつよきにほひかうなかきある物ふして皆人云
りとぞ

梅房先生を祭るふみ

此すふ秋七月の子国に皆は上しく地獄より帰りて
世にまつはるゝをとむぐるは供養せらるゝとて一年の招月な
がされのひろくの年の七月十四日よ歩くに迷ふ月なりせば

女之帰らんとのをりその名れうとよきりれをさの事を御門
出づ夜及びれ於佐て此くく飛ゆくとも帰国しまて我文志を
んざうまと子方右智識ら棒の名を茄子鋭きのすうた
身のはちまそ加え茂川の水とともに帰り出でにも身の包ひ
るれきら棒国牛の名なすべ皆なくなり加茂川の水
こゝるまゝ文宝を年よりこそは義世の人は人の身の縁
うれとのこ数すみ飛ん般とよあり今我も人をも帰りたまひて
の上てなりにとの名なきはびきうぐ冬をは多くも身の西無
れを我らまくなりて毎年の派宝十六日の年制には八幡年の年
たちなく地にて帰りるでてまづこそすぼろしけさを命らる
此宝こしころくしまさるべきせらるし家よ梅房らう子人々とかく

もいまだ[illegible]ねおりして[illegible]皆人いひけるハ何とて梅
若ひとり[illegible]されバ無こそ近ハ梅若[illegible]云ことを
地ぞくのものせき[illegible]に此事ありけれバ将んで[illegible]に深く
なげられも[illegible]無をむすびけるも[illegible]とも[illegible]
やがてされバ花桜を遊ぶ[illegible]被流[illegible]ひてさび
しくや[illegible]川の[illegible]遊[illegible]のこゝをきゝやしと
実に[illegible]ねや古のすがたと[illegible]句に[illegible]をさく[illegible]
[illegible]にきりれたり其上佛も生死去来ハ[illegible]
上の池の[illegible]ハ[illegible]にかきて[illegible]
まし[illegible]れたり此梅若ハ[illegible]のさ[illegible]一念[illegible]
されバ[illegible]皆人[illegible]梅若の[illegible]

なれられし人もこゝ無をとめがたく[illegible]されし
江戸の境地世まで[illegible]たる[illegible]
[illegible]ハ[illegible]御城ハあまたに[illegible]石垣おびたゞしく
御殿ハ東西まで[illegible]本丸より[illegible]高櫓
角やぐらあまりれ殿をは雲井まで[illegible]松風[illegible]
[illegible]万家[illegible]四[illegible]ハ
湯島に[illegible]天神 神田に大明神[illegible]
[illegible]田山に愛宕[illegible]はかり
て神[illegible]文[illegible]古
[illegible]ハ[illegible]寺[illegible]東光院常楽
寺[illegible]町[illegible]ハ[illegible]

に門をなさしけるの鐘鼓悪しく此なる

関東海よく鯨流るゝ事

此事ハ元文三日中に鯨といふ魚有鯨鯢のたぐひを知
出でゝ長サ二十尋ある事ならん日中に見ゆるとなり
其頃ハ一匹見しより関東海に鯨とらるけなり死
たる鯨東海へ流れより村人集り肉を切り皮をは剥
して油をとるとなりける事は昔寛延二年
五月深川近辺の浦に入くさもしたる大魚死して流よ
深川浦清六浦の海辺へ流れより深川中に居りま
ん然人ゝ伝へ是を買取りけるなりとせんに作て油を取
其事聞て士女是を見聞の外といふ世魚の名

知る次第鯨ハなしと見たでるけなきにと文に紀州自ら延の
頃迄宮東海に鯨ありけり人其ならで八鯨江の浦
よりくすうくるしは是を空へ吹上ける是を海より早やく
塩を吹かしらたかくる是ハ息をきる魚にて海底に
斗ハ居られ是を知れたる者ゆへ汐吹鯨の息と
見へ其次第沖に一村分至此所に是は浦の浦にあり江
之浦にて沖に我村立ならで漁候ひめ鯨を取
あるくにて鯨とると其にて鯨ハ湧にて流れ寄りける鯨とる
とりし是ハ海人共のとるとの事と其頃にハ八雲抄に
鯨とる舩よりまわりて大魚なれとも浮勢座
西国にて流るるにあり是より東の国の海士ハ流くるを伐

知らずや文禄の頃ほひ関白殿下と申しゝ扇册
にて鎌つかの名人あり揆三郎といへるありしが此後は鎌
の名人なりとて狩する者ひそかに縄をもつて悪しき鎌
を持ちきたりし鎌の手を結び其の魚をとる又鎌をはづ
かにしてみるをつきとめいかにもその数をしるしてその
腹の中にかくしおのが身をもてあそぶなど酒のみて肉を切
りてさらに食ひ遊びて数々の殺生をなしける事貪なる事のたえ
ざりけり有人いふ二目ならず須ひてそれの須よりたゝりを
なすは猫の中にふたつにかくすかくす猟師母なるのおもてを
して其の子の亡ばかりの心をみて問ひてかへらひけるを
とる甚だ母鳥なる事ありてそれ

洞血の雨とふりかゝり身を撲ざりすなる蓑笠を忍ぶと
るところや世界にも成生す洞の前の笠の上にかゝり家をも纏
しやすかりしの事をよみがへりかくて首を垂れる事も有らう
たゞ汚れなきは猟師のこゝろにて殺生無縁にしくはなけ
より罪も出で猟師の海人道をも網をもて獲りし鎌をもしく
なるに一年に百二百の魚をとらへてや十年廿年のうちに
浮(?)きとりし数は幾千幾万とも一年に海に沈む数と浮く
とをくらべんよりの境の世鎌(?)なくて果無く番(?)しかくすゐき
の大数も天竺諸越にも是に及ぶ次一寸の虫にも五分の魂
ありと諺にいへるにまれなる千尋百尋有鎌乃魂いかでか
かりなからんや

江戸町大焼亡の事

これハ昔江戸ニ大火事ありしことハ慶長六年霜月二日ニ
江戸駿河町なるの辻より者の家より火を出し折から
大風吹しく家々しこよりやけ立烟ほのほハ目鼻にも入て
家焼をかきまとひて老人女人おさなき者は皆やけ死たり
其餘ハ家々貯ぬ銭宝鏡提燈人々ぬいとさへつ家に残して
人のつゝも屋々におよばれ来所もなく立まよつくひ袖さむしく
家の内にも命ばかりあれども海月も骨にあらずとや我
此をも海の月ならてまちとくるらけむも骨にあらず世あるや
と一年を打とひ出て慰さるもの多かりし能きの事とあしきこと
も一年のうちには出来るもの数にいふもかはりなき人の世は哀なる

鎌倉の事といへば古人云建久二年辛亥三月三日鶴岡
鶴岡の宮に於て臨時の祭ありける執権御社参る
よりて御所中へ饗応を集まりて江間殿相模守小山
左衛門尉朝政三浦介義澄千葉介和田左衛門尉佐々木三郎
兵衛尉以下の者ども侍所にて後生り其中にも宮内
次郎兵衛尉らも侍共ニ渡て同所に鎌倉中大蔵
大炊助まで万々其後奉行の家々ありて一字も其跡
もあまりぬけれど鎌倉をもつて是ハ古初の維業の身男の名をも
此中にも法を以て其家業を残き内典外典を
学ひし其中に其名有ともいふ其眼ハ天下にのこり文字にて
後しかる後と云く是を打出しなから都に哀れの人多し

然るに明れたる丑の刻にいたりて中所大須賀のやしきに出来
れ角南風起りに此時飛散し次第敏相続き打上刻ま
代此企を揃ひ射の仕る二郎昌宗仁田治郎以下弥侍の至
形一同に御出取其業縁まる其の一ゐ備せの儀姿よろし
りけるに幕府も知らし矢島まての御勢敏廻府し
続而供待居恵のく此者をのがれずまさよろづく近国
の御家人皆ぬきまて辞義まで二ろ次第ゐ書状数息しのぼ
二ろ宮の刻に夜九郎甘縄の宅に入御しまみ岩上の屋
によろしくこれより郁房かさ見なならさせたまへしと諸
人々あへの方より書状幕府よりおきはたくみりけるに鶴岡
に集りしがかるに櫻石をもちて御所へいきつかしむくるに家江

戸には見れすに名をとるすかせ多くなれ給ふ以八丈抱和合
さらいさせ幕府よりまうし抜とよ当ましる人々は此の
人々は近所家ま尋申立皆立しとやされしは文江戸の
中の其日のまかせしに御一條の国にわたるにまかせ次
此外よろしく日本小舟も見くれ其黒縄の中より何れの志て次も
一丈余の中なるを船の飛さかるけるの気を肝を消しあ
おそろしき物のなきが家の国へは海道へ旅る
をき見れども一天の此様扇風に之より得とけれ江戸の
人々此に有合此扇風を見まて之より戸は江戸とある所
に片舎新た人々らまへ人の扇風と給にはしかる聞きを云
性なるよしたるもの地の者共出事で宜しく事務の

望にあつまりて大きなる目をたて下をみるところに数限し
たゞ紅の大空に雪降るが如し次の目は弁天なき布袋七人の衣裳
屏風なる所の図を画ていと見事世にもきよらを以て
寿福神人帰り屏風に係の所にて絵人の飛たるは弁財天我見
たりし人毎に語る皆人感じけるにこそ賀を又福禄を
立てゝ七人の屏風ともおもひしに尤なしと飛ざりけんところ世を
あるまじくふ人なる人の云く世に語り伝ふる感もあんなりきる
やうなるは路きなよ言しされども権者化人のたぐひにもあらざるもの
の詩紀其の文義を加へ画し妙文をかき白の人の為には耳
おどろくるもの目有なれど人はあやしき事をもかくつくりたる
ままにしるしき予言をば語るとし いつくが為しき様なれば

語りて益なしと呼さえんられたり此絹を絵図にかき画し其譲
られし屏風のことをかり此乃里人に与へつれを感じつゝ今に残れ
る事は此噺の帰れ尤も無財宝福人の余財をくくられ
読み継語にありてまさへもをは語りて益なかるべし
杜園雑書にあるしまうけのこと
それは今江戸通り町或人のいふに思ひかけずも六人ゆゝしく集り
世上のことを身の上迄も今におさへ談話を亦杜園雑集に
云ふ人のいひけるは世にある事はいき在すしいふにとこそいへるに
去る年ある町の理師武士共商人は此方の相伴よりも
可なしにありしたり此商人福禄たるによりて大かるに出絵を
立たる屏風を広く其庭に植木をして深山を見るが如し

海苔船の精進料理のくる所なし其上茶漬ばかりの口を切
物にをたてられたる世にあらは新をかくしてある白酢し
られられ果報ならしきなひくるひなし北の人の手てもな
しまし遅ひくるへ此を報ぜざれたる魚るるたる肴なれを
何處ハろひくても苦しうら作者人様斗出まします家たらざる
るまじ其上られ料理ろうを志ふひろく年よりくん斗
ほく料まるるうち深く情ろのみ様た世よりのみ人安く三年
んうちのにほ南しはよたび六人よひのへるれとし様斗出
なはる手毎しといふ文芸人のられ国紀りこよるの五湯を
三年入て使利て会力まで毎しといふ文芸人のれさる名所
よまで何事なうたあるくしき書法ハまを答しといふ思ふ

第くは経上料坊を飯菜一盞られたる給其茶をと
精気まへしといふは文芸人料理をハ其味ままの世の一統何
なしまうし志ほうしく法をおまへし其上られよのきこえ城
おゐ会たる古人会味噌ハ百味のあや新学よれ包ゆ一つとくる
れ味噌ともいふをもちといふの始有源氏よりいたく書つき
にむくらしといふ香の名ある文会る配ふ人ハ味噌をひらく
しとのく南ふに雑人中人のこともだりは味噌をも出るといふ見
ハむらしといふ出來をもく書といひ出るてもありて源氏の書
づくしの中よりこそしといふ書ハ白ひもまてられて志て入たる
書と有る様々く白ひも深し其の文を高くひくつしと思
朱くろ日らくし八出の名こ物は蝉こもきぬをぬいくく後を

日ころしたしミし友にまて蝉ハ空の事知り見なれハ秋の
事なし是程に其音に蝉と日ころしハ同し物を聞なれ
乃ち飛きし候事数々く用る作来物に秋なるか
に独ハぬれけりと云高白に日ころしみなけた蝉声を
作らくと鏡に法下作すし無可んと味そハ初の事に
深く自し古味ひよき声にむと名分たりみえハや作し
く源氏物語おもしろくそれたりられみる蛛物気ちへし
といふ蔵主の歩かくあられしや法華せんと宿に帰りちる
其や此あ人ハ此时トよくいとゝ人を其御師返すにも此あも
此念人ゆれ此使か能よの此時ト結りと申たち男合気るを
いふ此蔵主其歩のく程御念此时ト京ちり友ハとハ満足こそや此あ

本望しやれくとく汁をかけよなと幸すを頭へよ料理のうけ
んよからへし此住御飯をはつろきの取くてや望われと
ほむら雨よ後又云ゆり我ため飯ハ食難いは人ゝ物あり先さも
ちらは空あく御人の所にて阿の阿しくて群よまさひ夜
よ人帰りの子笑しと門の先や世を云蔵主の笑て肝
を消しるとも何るとも丈ハ淡か明晩使の返すおもしろ
明晩気へしとやつるか但失念したるか梅もほれ志く頼
心つけ志けは我かたへハ淡の不所たつしやれ不面白き物を
可ふもいふ尋よくしく膳立て

雲薪乞食の事

又ある八百屋より子よかきさ江戸の所まてろる神田町の

真如寺といふ寺あり修精よく達てえりけるハうれかし釈えん
妙きにて男となりのぬく送りしにうらあるに我にあれかられ
無縁蔵清たらんやを法にかへしき蔵にて身のうち深相
に男をよくしてはあつかひに足りて枝葉とやなるに
げすてんとするをおさせる得わなし牛と報ひたるかすし
なずして月日を暮しかくられ貧しくなりて親のつるに
無量しきりんぜくをも皆貴ましく妻をもしさられたる
男となり一夜きたる中にて寒くれば古き衣を着た
白からく見えるさき昨年の此孫は成り坐しと云者侍
此事も思ひよらざりけるが相悪業をたくはへたる者ハ師弟
地獄におちてよくきくものを思ふに是ハ師弟因果による禍福

ハ門弟子帰人の招所にあり其上紺様ハ筆にき縁にあり次
冒頭に今ありてんかきの起りをしるしたるものせんとは奥冊
信文にいふ女人が枝信文といふ所に大人の侍る起しのげり
大宅のうちに住みまつるに係るいまを得て年月を送り
後に志しける人のうき縁ありし妻の女道き報の修あ
をもちの男を恋ふるらめにまちて鳴りし夜もおそく泣
帰す其涙悲嘆にたらぬうちに思はれぬに
き絵の袖にかかりて深からず哀れなる文を認めしものの如しきを
其国の人見移し悦びき者有しにまかりにあるを見ん
今の世になりて此者すなはち信文とて云ふ報にいたる
堂を御門へさしけるうちのいくつの花のふもちず住ける

乳をあたへ養育するなれハ一番是に甚深世の人
かくのごとく成長するによりて紺といふ事になして紋
といふ物をはりかけて第一ハ赤ハ紫にして蒼に深しき綾
深く織られて紅なんとにて深きことあやおりたる文のかま
衣裳の紋を織まいらする帝の御衣に紋をも織る糸なり
正月より十二月まて一年六斎の御衣を織一月に三たひ
てにもつ一年六斎を十日つとめまて正月一日より十月
とめさせ御衣をはその日の御衣として蜘蛛を織青なし
牛角にて御衣ハ萬葉の御衣として七夕を織少紺紫
これ前にて霞の衣として宮中に織白しかくのぬく十二月を
経し織なす文字の御衣の子月に不浄一年に都合

十二衣を織ること十二ヶ年にして縁にて後に紋を織
まる事組まき綾おり目出たきものにて女人方の一大事
女儀を扱ふかに其善悪の果報たちまちなん
に因果の理を説して此世ん弘法大師人間に八ヶの
大事をあけられたり一日の大事ハ食物一年の大事ハ衣
経一部の大事ハ敬人女人の大事ハ難産
百姓の大事ハ農作男子の大事ハ盗賊後生の大事ハ地
獄なりしてこそ衣裳なくして門外へ出て食しくく世を送
ことは皆人衣裳を食を見てさて我人の子孫の続なれ
ところの然せられんにも衣裳と食衣をもよふ相文人の
その子孫をうても衣裳とあらん衣をまつ御世のために

てら〳〵ふしぎなる法を學びて法ハまこと〳〵しく名をよばれ
じと法を沙汰せず〳〵たり

愚筆子法のくはしきの事

みしハ今昔人多し言て愚息一人を初よりあつかひにしきたる
とてうひ首消しとなけき出生ある〳〵

愚息数一萬首

おもなるは たてつくる事もおほきそよむ事のちのある〳〵をせよ
ちらんべのちらん法〳〵よはきてたとへおれなるハにつらる
法しき〳〵 みへの一萬首あり

見聞集 巻之九

江戸町衆なき目安箱つるさるゝ事

見しハ昔元和三年の夏の比かとよ江戸の人門に目
安箱をつるさせ給道を通る人あり
はるかにぎやか大名江戸あら〳〵御出なる者ともなし諸人よて海
しますらんとよくされば江戸中町ニ住す〳〵や六郎右衛門
これも人も是非にてきやつハ御前若ぜんたん国大名
の御目をしとや目安箱を〳〵くかせと相なるとや町人ニ目
として御合ぬ振舞わすとおのれかにとハあるじ大名
衆の〳〵も目安箱をやかてつるん〳〵かれ所有れとも人ハみんなそう
じ些世話を先はれうてもなきよ御事にまきるとる財をつ

かしこや只ひとり説をとくけを通りけるし給ひけるにおかし
けれは只つゝ是大名と太郎冠者が狂言ますし似てたる掛合
しく男しいたりしが今ハいづれも絶えて皆棋箱をもつか
なりきの流れ次第世の風俗昔に替りて互の取
ならすしてなく

碁家秋月鶴淵浩せる

是れ八今碁家と称し年よりたる本郎有名せし此碁を
碎く多くは機かせ相撲をたくハえて後山城の国出家若山
のあるかと言ふ者もとハ法華宗の僧とらば寺に居りして有しが毎
月都に登りて世男の名持を淵浩せる宗碁僧を望み人ハなかり
此碁者となりて永く京都に住みて楽しかりけれハ給

堺のとせや宗安と云しもくかくしある人ハ此人今ハ無造
ひとくみける八人の金をも取ひとも出来さるハいつまでも宗安を
て先勝をも取るましときに又京にもありけり宗和てふ
にも碁会をなし本因坊と利玄との碁打乱真ませし
利玄一局打くに屋敷の国へつきの首ま大あみをおかし
たりしか本かれを本因坊一局打て一目つゝにも大首をたて
なめとも云れたる人とかる本因坊の云々全く去れ
きん稽古の春に利玄か古碁名傳ますに名人の参さりしは此人
又は此人の篤術と名付けるハ相似稽術に似てて勝れて手
る折りは其本にて大事を拾ひて名し古れ碁も拙者をたり
老かかる此人生涯を得るなしとかしてありぬ

悪鬼清十郎元日をよろこびける事

昔しは今江戸町に悪鬼清十郎といふ人ありけり世にたぐひなき人
前内の稼ぎ文字に巧みなり請人年此内より其の事を
達しと決してめ得れば万細なるや紀律ある事なれしや
我ともおのれがたくなきるに所にて年比しられをいふとはあらず
り又基修行も胡しきありけり無人ありし一寸の存知ら
の為に後を知もへいばと縁せり都に皆人極月廿九日晦日に幽なれ
ハ元日の衣乃為なる如く魚鳥畜類の肉を申急ぎ次第ハ
何事も請に肉食せる口ハ死人を拝むる様なりといましめしかハ
節くるはひをおもてにくるにあるまじや節分の夜大豆を煮
き明年元日にハまつ年神を祝ひ請人ある人ハ待を祝ひ

年をおくりて年越つくる事限りのといふ者又人侍りし
後成は迷惑の年に悦ひおもひるなく葉ゆゑねといまだらに
年をつむにも神をぬれりりと縁せり元日人来て悪る
を差く生まれといふなる分別なし元気斗のある倫し
いふしとりなお申に身をいふ細其ことるに色の来て
と申御年の祝ひ無らく捨遣にかぞへ来れば我身に積る年
月を送りむかふ何急くらんと悪鬼なる人今まさへさね
月日をくるまでのたとへは屠所の羊此ごとし歩みて死に近
し故に悪鬼其をいへるの軌しと云ふ事更に悪なる清十郎
の元日にや元日の夜鬼ハ来て福ハ内へとおきめ大豆
をうち人毎を悪くおもひなれども誰ぞやらに見鬼を

右一首連て哥に綴せり是ハ大同まてのまつりことの風躰を
まなひて天下に於て其の御の末きまてに美のさと人
歸のたまつ所の命ともおろか事ともよし和哥といふなる
ゆゑに其秋のあはれをさとしむ出所ハかならす綺色をみせしめ
前もまた人の心をうこかすこと御其の元目に月のおもしろく
の國近江の其に中に歸り出新古今に載すとは能職
まことに其を報するの事とおもしろくかつ和と綴せり當源の
叢ゆゑに草木に後も花咲其の恵をうけてかはれたり法下に
たるともいうて其紙よ綴てなほかんを法下に及あれかし

武蔵と下総國境乃事

えしやう角田川ハ武蔵と下総のさかひを流れ出されたり

すまりてあるに後ち名にあうてハされぬ海も家に御草の其
立ちりハ下総の國に石有るなるを御草の其哥に詠じてもあるとう
然るに五月になれともかんして舟にのせてかよひ行
まへたる牛嶋の里に河へ舟をさし寄て牛嶋のことハおた
をはなれて待うけて利口を云て笑子に古一首まて
ある井るハまたれか出をおもひけて向ひはなれての袖かなし
こともみし下総の國牛嶋のあるなかに其のるか如くをいひあける
者經に牛嶋のことハ是を江家に出ひ者に武蔵の名を
いろひぬまて兵五月御草乃子兆御乃舟に夜深末
る所牛嶋のことハ其根にかゝるかんをきる世あけ
たるはなれてもくるの岸へまる續き恵も出宗す法

不思議といへども花氣の時を尤ぐ人も爾義の名ハ前後の
地ると自ら此がくの所くの國境をめ蔵まく人々よく志くく
分られたるゆの無然さしよ
書紀弁を撰る事
其しハ今住子大字御と云人出生書記と名君な申され
ける八近頃大坂へ御陣立れけられあり其よりさよ縁ひハ
掛るるがかぶと宣る大の目をうけられし大名見料のかぶと
多くを一押形との形を畫一し其方能年するれども書く
たへと説をおき書記弁を板数かぶとい立字號ハ云れ
をおけるし入りふ大字御筆くられ文字くかぶといふ
文字数多出しは此られ書先式之へ書記筆くされど甲胄

乃二字を甲の持くはかぶとよろひとよぶ表記るに禮記
の書にも甲をよろひ胄をかぶとよめりハ此二字のよ
みさかさ自よ漢和遠なる知るよ日本傳よよむ人を
禮記のよふにてなるなれ甲ひ出る方をも人を出る
かかるまづくはかぶとらの文字ハ遠からん時ら記くまる
年号のあや傳りまして年々ハれて年号を撰て是節まで
云し当世も今日本に萬尾國乃例を学ぶといへとし
ある遠の年号のはけて行くしくされど遠册にて坂
とりが里よ典年る如有く數多所より江戸御城下更る
文よ日板新板入板外谷書たる而字お見来るる見
まよりて此中世里の内割れまし假名まで書出すたもり

西家は其生所の志願なしとて用の時あらば能々御
出てもよろしかるべしとて
牛物語よりんこそのゝ
見し八今江戸通町に未新しく子なる親人金新五郎といふ子
善き親人金遣ひなりしは御牙角もにて生命をたも
ちける毎御年はいかほどにてか親人必々腰をたて
牛馬のかり出にて年の暮ハまる我なれば我のの
ほけもなしと人々に触けるに新五郎必ずく年の暮に
此腰立兵ゑ者は此道理も怪しき親人いよく腰をたゝくさ
ましにて道理を分るや川めの年の暮ハきつくらんいふてけれ
いゝ出したる包まてく券をまきつゝく新五郎も是あらをとる

けれど鼻の穴やいゝをはなしん鼻血流れくまんとするに新
五郎ますますや兵しらんとて返さんと力をかけ鼻のあなを
ひつけさんとしけるにかられたる又親人の右のあるより黒血たり
くるを見るにそこ其町人あつ手同じ事生まれく
けるが八此程呉服町のたるにて与三郎といふ者楊枝を
割るとて小刀にて指をきりおびたゞしく血のあふるゝさへ御きもも
にて病後にて身まゝかれたるが伴りて血をあやめけし人々き
あわれど御きもも西へはされけりきつず此そばにあらし人あ
りの町元より其呉服町の与三郎ハ小刀にてこそきれて
出では切痕あれども負傷にまぎれたる是は去年病
あれど鼻のさきこそ痛とはなれたる爲の疵より血出ぬ

勝たる斗牛をも負性にハなからず此塔此額人是をとて
あつみ町筋こそ人たかりて此處に於て伝しめてさかりになる
先哲の遺文をよみうる処上にいとも甚多くハ人命を
やつる川下に天下くされる者ある人分ちをさんまといえる
其名忠貞乃二字故さんとなん

新橋寺法国らんざんの事

こんかは昔江戸町当然の處あまりに此処ありしが新橋
寺まいりより坊ゝ此所を到りまゝにけしらへ寺地立おく此寺を
住みく集ハ茂めらくし云乃母し八丈江戸ハ二丈下のみな
とく法侍の集るちやうくとしも八幡の子孫寺我此
所をたに沢く法き立甚よ新八幡宮武士の氏神を

建立ありしよりく日本六十余国を大切にさせき
めぐり大石小石のためし村里流をよ其所迄もおられく
らんぎんもありされハたゞ七八寸よりみたかりするさや
いまだ立柱一本の志ありて次第昔新朝流義に年
の為瀧谷ハ一刻入先生落飼乃為有を立すよ同五年ま迄て
化すは霊寺年かゝりよ建立ありの宗明れたし村を枕や
を許よ用らすに寄進年具を取し立ていれた新
橋ある先大てゝまも社を立まゝしまよかく二明る今られ
かまりに大きさ引きありて十年此寺のまかとよ梅田此邊
宮形まで見物まゝ戴きは歴代不並威をぬくされも
人も此邊へのぼりて見られる草村の中よりまて帯泉[illegible]

を立置て其後草のかり屋を結ひ御幣を打立め
家をたて給ふとなりしか是れを草ふきとぞ祝ひ給ひておのれ
海士村又律田山の近所ならびに其所なる昔より小塚の
ようはけしてあまく富士浅間立せ給ひとしふしぎの事
信敬せられし他人是を見て拝み奉る近辺駒込より
里まで人あまく御手駒込へ参詣のよふゆく垢をつき其上
に草の庵をむすび御幣を立おきつれハすみ所の組群
集まりしも今の里人是を見て新ら神を祭り上とし
れしよりやむ計之今もなれど駒込の社立てし時の
手かきあまる大事な立て給ふ神縁まれあらく皆人是へ
集まり神ハ人の心やすからしく感をましたまふ事也

れしきハんあるたびおこりしまつりも立なしかし近國他國
の老若男女皆来て駒込の富士ちんりやん参詣し六月一日
大市立て盤昌なりしが代まつのこかくのあきらの事の
大参詣同所ふえて新宿ち浦賀參詣を以元其次き
また新宿をはいりちん古跡なつきりのみも元来より記
るといへるあれど先年つくり草の社を結び御幣ふり
とし立おき其たんあり新八幡宮御立ありと目出度
の月もあり高札立相ふれハ江戸ハ勿論見たけれ所にく
老若男女集まりなし猶宮いや増しになる事を志るぬハ
無のうたてさよ

都て仏事なまず事

さて今ハ江戸町に義太夫といふ人あり浄るりを語らしむる上
り節の人多くいはゆるハ古の声の曲ハ大かた大坂の
ごとくにてすべてにしてみなちかふれ共こなた賢より加
はらへんハなしは多銭を出して是を見物するなり又ひさしくは
とうえうて人にしたかふ事にしきれて平不其の筋こゝろとふくし

唐船紀(?)し見ゆる

これハ昔若き七年中
東照大権現唐船を紀らしめ給ひ浅草川の入口にて浅なそ
めよろこび此船を紀らせ海へうかべるまで汀にてハ人分も及
びけるてしいふ今ならの御立有とかるゝやはしるゝ事利
まあよりす先年江戸御城石垣をけらせらるゝまふつく

伊豆の国まで大石を大船に積せさせし小海中へ入れしに引く汲
を筑紫(?)し多く底深き海に舟を并べ陸と舟とよりつなぎて木
を打渡し舟をうかべ又しんろの如くなるものを作りて其上は
萬の(?)のせ舟の内にまきき車を仕掛けて綱を引陸より引く
ハ多くの舟を持し石を押やり舟より出る舟中まきき
車の二三寺(?)持したる数又唐船海中へ沈めて海に綱引ま
き車も立ちけし陸まてくりよせたるも及ばざりしとかうされ
ば昔宝鋳の何代漢会曲井浅に於て唐船を紀らし
免めかいたるよに細あり京良より陳和卿といふ者蛮舎の条
三まで東大寺の大仏を紀らしたる宋人なりされ共東大寺
浅末良の日本将軍家良へ進め候はじ小事え御家法に[illegible]

さしもかゝる時にて頼朝卿和卿に鎌倉へ下り後世の為
を助けしめんとありけるにつきゝ合せられしかとも和卿
かゝる貴客ハ多くの人命をたちたる罪業ある身なり
値遇しまいらせてハ却りて其の障とならんと辞して得ず立
去られけり右将軍実朝卿に於てハ権化の再誕也と此乱を
撥し給ふ事又其由あるの由を聞召て密かに後の為とて
対面させらるゝ宅をたてんぜられ和卿を御所に召され御対面在
和卿実朝卿を三度拝しまゐらせて落涙に及びて将軍家
其礼をたゞしかの孫子の前に和卿申て云く貴客ハ古へ
宋朝育王山の長老たりし時に我門弟に列せしと云々実朝公
仰られける事あり去ん建暦元年六月三日丑の刻将軍家御夢に

のかゝる尊僧一人御夢中に今の宮殿を請けたまふ御家来の
ることありて汝は此宮の主なりと仰されける所に六ヶ年に及びて
忽ち和卿が申状に符合せる故に御信仰の余り御渡唐ありて
我が前身将軍家先生の住居せる育王山を拝しあはんとて
結構に思し召しけるこそあはれなれ是によりて唐舟を作ら
造るべきとて故和卿并宋人に仰せ付けられたり此頃の人二千余人を
以て官の結構頼朝卿光季等を奉行として相州武州頻りに
是を諌め申さるゝといへども承引なく終に将軍家は御渡唐の由
に及ぶ所に此船出来す彼舟を出さんとて建保五年四月十七日
数百人の力を以て綱を引くといへども人力に叶はず彼舟由井
の浦に浮べむとすれども実朝卿の御本意空しくなりけり彼舟は由比の浦に朽損

為射

ちり先今日の如事として諸人見物しける午の刻より
申の初めまで射留る也それとし此所の為射御舟也昔ハ海浦
にありしを諸人申けれハ將軍も見物して御引し有し此舟
はなつくし松の上に柱を立其上に立たりしハ人皆く
鹿舟作る事は地形に湊を見ても出来る浦舎の浦ハ其ま
汀の波高く其上浅海にして小舟乃出入も安からぬに先年
御上しめす浅草川の御舟ハ浮里の国浮東より浮記
乃右ニ川をひれて御舟作るべき地形なりとて
其浜の松の上に柱を立基とし其上に舟の形を立
東紀の跡より松を堀上御手置の柱をおしてさけ堀の手
に舟を立此舟海中へうかべる様に見えて浮鹿をたて毎々

其所に此舟のある趣ハ流し入舟のちうちうを以て海中へ
押出す守りて其を昔浦舎の人も知らざる事にや

柳は其名あり

りんしハ今本の実さ白くある中には柳と其名多し本法
本位麹柳志婦柳あくたん串柳ゆき餅ハ其実は
法う柳ハ近年に出来たるも大果とは女柳の名ハ公家に
まよう味ハひをかうられうされし濃君に大なる其本に
大御所様御目を代くろて此名に入はらひして御所様よりし
あうと此之一人之かなハ此柳ハ兵庫の国より毎年江戸へ差
る者進す此者を柳を割て此國より往來の実名之其実
ろ旅世上に此ろまう思ほらんど諸人の家々へ献上御所様

とゝのへたまひける時ハ御所とハ公方の御名之
末代まてかくハ御所様とのみ申候を当御時代に移りて御所
様と呼しも老たるはまんどなかりけりすなはちすゑし
になりけれ

遊女とも江戸をさるゝ事　世にまれなる物語なり

見聞集巻之十

浄和軒観音ノ日まうでの事

見しハ今江戸いせ町よこ国浄和軒といふ人あり之を
り法華観音ノ日参していたきの命もちかれと祈るに
子孫人死うさんとれ観音ノ参るの事常のやしき清き読
音の御心をさわり給ての免きあしらうのかされさしも我よの中
にあらんかきりハの御意をいるれやあまくるしとふとも
笑ー

城言庄以片いぢなりける

見しハ昔恩見いふきく傾城草子をかへる其中に右之
末代まで朝に傾城の國の國代八段判定事兼隆を相付

かし義気をあけしらすも倭国の医術ハ殺判皮とかくし
ひするはちからに言人の医術をくやまさきお判皮と語るに
まさきとすめとの本願をやくやうも生ぬれば同意したり
一人の医術得名志存けてる師匠博言得ハ生国浮世の
人なくやまさきの事をよく知く用し何ともは得や日本諸人
志かしごハ医術とあかし名を付くる思ひたりしとこは書つ
秋よりよ人のかくいやせまさき徳りたしで西ある也し此西統覚
出来し今人毎よ貴ひ益名豊書記平家物語よ八殺と記
し東鏡よハ此来とかき殺文武文よハ矢殺と記せりされと
其にうかはく古今用ひきまはりし利るときんハ医字なり
なる候是よよ作く足ひもせう本国にあるるといふ人の云年

此来の土偽の国中にありきとしは爪を剣とりしおりきとは何と
書ぞしきるとれ了れ百里の藩若くるの西ハ志ふは昔より
小臣と書きて半分高き出るらく小城押ゑて大人をとるに古人も
いえり若えかさもあれ丈よりの志風と書きしともさぬれりれ
ハ地頭の字はよ倭ひし大風と書き医術の者き実わりしいふ
大かまくらかもとひたるよとろや是義は時のまかりし
きる候よ内くも是くかたしら部の文ほ矢殺と記せと
いふともあを白ね了人の言伝よハ八殺を用ひるくも残りしかる
在りしとそ

佃秋東国一見の事 付 武君濃筆ぐるしのる事

此中は今佃秋とりよ笑西人云乃なりとれ東国を大ろくらん

たゞし古き云ちまたきなるはてもなし鎌倉志に露座
の古仏にて有けれども大社といふべし其由を記
せられたる名の本の少年之昔加自ら右京名のれそ
大寺又仏もある由露し文治元年六月露国に洪水
の時古仏にあり其頃も損じたる大仏あれども堂なし
此大仏殿は建武二年八月二日大風に破損し寛東下
其後又立て〆通風に皆こと〴〵く損ず又前出の大仏殿は之
其人のゆく所世の向志りきくゝとはん為られ之勅願公
治義元年十月二日之同十七日に鳥居を立られたり故
義家御建立之しゆへ大塔を荘厳す南に武蔵国
御ネに郷司より上る工匠乃棟梁是等此れ出る和泉

ならる丑の年宝暦建立しけるに寄七十九歳年近江白
出来年にあたりぬるに郷に寄代中井大和守と云人立入れ
棟梁ヨ京大仏殿江戸駿河の殿をも立上り此宮も切
ありし大和守大坂へ馳参る折に軍中にさんざんのさし物
を侍人並をもちんく構へとあそばしさ義御感ありたまひ
有る返す所にも甚ゐきくる上へ大和守と志られたり
それより後ちにあまるを所せんなく矢倉はいまも清くこ岩垣跡
門もきちんに枠く無し続けてまびしあれ代ゝ実の名
ことなく和なる鎌倉八幡宮を見るに今ハ社のうへゝゝ大立の
秘術も宝ゝ寄りらんしき事の熱意をは旧古までの爰
釜ゝの次く事にも記し加もしいちんや未代に残く是を学

多人を居らせたて園をおぼろか原といふ茅の庄をハ
なを知らざる其所の者なりてハよく知らしいふ
蒙次よき栖越ましける
且しハ昔上野の国関根といふ里に蒙絶ていふ男
ありし頃無骨新たに来ましら六七年の前江戸へ来り
志家の町をかれまちいさき茅の庵を結び月日を送
りしが年を追ひ其身よろしくなりて今ハ江戸さかる町
まで家毎に茶を求め茶汁桶をたづさへ人の身をも賑はしく
治たる毎文昌吐得て結ども都にいたるも句をおそれし
まさき辺の宿の稲を好きけりといふ紀巴付られたりといふ
神田大塚まで切人火定のこと

是ハ昔寛文三年の頃ほひ乞切人江戸へ来りて神田
の原大塚の中にすまく来二月十六日火定せんとふれて町を
めぐる翌白もきこしまかりぬれど老若男女大塚に集り
ありけるさ中にや己を独まんと念仏高声し席を敷き
しかせきたちとられりけり塚中に柵をゆひて切人あがり
其中に薪を積み火を手づから付て切人火中へ飛入たる
ともいふ飛かゐるをみるのり人多くばよろこびはおとしたる
ともいふ義も胜に見きりけり此の日明なとしてちかしれと
ふたたび大塚のあたり城のみるに人家ハひとつもなく茫々
ハ冑まじりの原中に跡たり又いづくに蛾さんぶんなく風ん
ゆる古墳まで月や照日ハ流ちるのもれのともあり此通塚切

ちりめんこゝろ

江戸ちまた説の事

此ちまたとハ大手ニ云る此頃御法せし大石氏の霊廟の事一家ゆき
てゆく行者の此処なるを云ふなりさゝれん江戸よりのちの人〃ある口ハ品川口
田安口神田口浅草口舟口なとよ五口有江戸町より一日の
うち歩へかのもの義なる勇者おもひちさぐて此処なる日光国へ
此又はたゝらんといふ昔よりの記し置たる物語も諸人の見聞ニを似
て書置けるは此に有し江戸所まての御法せし大石氏の霊廟の
み多かるを〃し我は塩冶記をみ候よ平家のちやくく小松
内大臣重盛公の子息惟盛卿と云中将惟盛ハ滝口の八
し白乃戦場をのかれおゝくたゝ中将の果所を此巻に語りし

説よりく化せり此事絶ハ桐園大通清盛公の事城書なとニ
能申云平家乃事ハ多く記し置れた故あまりにくゝ書たるも
見えたり我は中将之故あまくこそうれ〃ひなハ世の絶
れ有向しきよと云説有りしかともふたんくといふ女源平乃
事を縁起なる絡たり見も大の物語（塩冶記平家物語ナニ）ハ遠き事のみ
あれいり形る人々残見へけるにや見る又見え申さゝしといふ

江戸大橋ニ毎日刀市立事

且是ハ今江戸大橋のあたりに何となく古刀を持出し市
年ハ古き鍛冶らん並出し刀市立て刀をぬきられ物をはま
しき新しく磨き持くる人此方迄来りて云はきぬ者々甚
大勢人多く立交りくへの然路をうりひろ見をとる人也めずらし

悪にほこれて終ハ火あぶりはりつけにかけらる又ハ盗人けん
勝手をしける者も来雲いふハ力のさけ続なしと切害をとらう
一身上の持をもちて日本信にさらしおくなるかハ盗人猶く
なく天下穏に目出度御代になる右年の御代にハあらざる
に人の刀を箱に納めしむるかや太槍に常に抜立抜刀人せるほ
停止の旨仰出されたる竹林抔に隠れむとすれど今ハ志ら
れざるといふ其身に武士形はじめ紙にて衣を繕ふるとある
られたるも今更に思ひ知らる
御代のありがたさを志らざる事
さしハ今天下治り国民豊にして又難き御代にうまれあ
ひたるとも猶に其者ゆし事に候へとも猶々御時節よりも思ひ

をあり此ニ思ふ国より毎年江戸へ御手向の御年上
いまた寸ハに至りたる所あれば死ても忘れじと思ひおさめよしに
えらくも休まるよし何ニ哉も縫き所ぬ所願ひ出世の御縁
を結び御まんぞんに叙りはゝと潤を流し中斗にもあり文哉
財宝も嬉の枝にまとひ御肴形へ御患追にたり君卿にも
至り是に町より是近在縁をたくぶ志盛悦に思ひ
しも今日ハ寒き天気なる節に霜ふりし今度の紗力なり
さぞかし諸役中寒からんと思ふに思はれたり常なるを思ひ
せりひ年寄の所ハ風志らぬやもし是を忘れて寒風をよけさ
私宅に帰り近へと下されたり拙者共これを戴き盛る所
にめいめい自分斗にも私宅に帰り妻子たるにけのもを語りいゝしき

舟を上としてありけるのを御信海山よりも深しとたゞ
納然與へられより神ハおはしませし恩澤深くまゐらるを
出すにあまり小西よいひたやうに毎日の中迄到し侍る
事他の噂をきゝけるどもなかれハ古頼立て奇ま年くそ今
ハ立入りけれどもいふ為由よ為無れだいろぎすありしせる
にくきは樹蔭什造るも留りけるにあるども到く立ち
ぐる所を世話にいたるかごとし年壽越えられん人
の行末の命なかれ是をきかせんと古き言をも是ゐ侍り
ぬとそ

湯嶋天神御鎮座の事

是ハ昔湯嶋天神の御社あれ果て社壇もなかりし
かるむとられ社頭ハひとへに塵にまじハり神ハ威を失ひ祭
祀孔菓も断え樹實果社も絶えにくち無斗にて
和光同塵の結縁も案ずる年を加ふる所に神ぞますます滿
まといふ為ふよ擬せざるちられ濁世によりとなる所附
たるも是ある拓りにて所よ寺君に入赤人すむしょうるのさ
國霊を鎮居作るしにはなりていれ今湯嶋の社へ神を
勧請せられんやさらにも申ら社壇のちるをなくひいが
きらずをがきぬ古土乃数々へたり果張あまなよあやしう遊去を
立なるハしまくて急に所用あり毎月乃縁日其余日一
来能くも十八日年八歳縁んとたをなす繁世無世の縁今成
錦しかあれの他にいろなる海辺よ寸土良く作去経まく

向の人々ハ道をたゝしくさせらる天神ゟ罰あたへられけるとそ
そのかミ天神ハ筆業たゞならぬ御事にてましますゆへ鎌倉
各御成敗の式目の奥書起請文に諸神をのせらるゝ中に天
八之尊の主と帝釈ハ欲界乃主なり須弥の北に
をはしますを始として日本国中六十余州大小の神祇を有ハ
殊さら義にて殊ニハ伊豆箱根両所権現三嶋大明神その
三社ハ宮本乃御社八幡大菩薩ハ宮本武士乃氏神にて南大自
在天神ハ鎌倉の鎮守なるゆへ此ハ起請文ニ其所の
鎮守氏神を乃せ定める法にて若諸社の神官神人等
起請文書時ハ其他の社をも停止し関西ハ北野関東
ハ荏柄天神を書立る事ハ是大神の明徳の故事なり

松を思ふもの也荏柄天神乃御威光を知らせさせ給ふ梅
文帰し奉る神ハ菅原御井人ゟ外ニ此奥社今に
戸田ヶ追年をいたし奉るは信させ給ふ思ひ出すハいはし
鎌倉各御存世にてかけらるゝ聖神れど帰し奉る神ハ江戸
の鎮守なるとや中きん云々東風吹かばにほひをこせよ梅の
花あるじなしとて春な忘れそと詠じおはしければ天神
の御所へ飛行せられ紅梅々の梅の枝さしけれバ天神御
かくて飛梅くあんらくへつきにけり桜も御所に送られしが
言なかりければ梅桜とてあはれしきの日ぞに
同じ御所の枝をかはしあはれなるいかなれば梅ハ御そ
葉まかりて我ハよそにはひららぬ根さへもまかりて一夜に枯れにけり

まかれよりも御しる寺に梅ハ飛桜ハ枯る世の中に何とて
松の残れるかと尋ねてたづねられけれバ松ハ千歳のうちに
法のみち一夜の契り有るがゆへに名松の明神といはれたる
とかや

一 花の縁に因かける事

此中は大かた自然の縁句に咲あまり残るくさあ草紙
花も移らせられしも殊勝なる事にて仏の花を
縁ある方に数すまじき事にいかにしても是非の契りなんうつろん
果て人のうちにも縁なく又われめども数もみちなりけりと
り念句にいかにも見ることろの花に待して宇治無し
ぬる〱西行法師の縁に埋れ木の人といはれしとめとも

さくらの花を契りけるが折ふし人のうへいとやくされのな
かにも法にわかれし自他の差別あるは妄想之真実の
為にしては自己同前一枝と見る眼に自他の差なくて
是なるらん

一 忘れがたき友とする事

それ親類にては親しみ縁ありければ古へうかれしと
いふる古き人の身のうちに忘れたる心根を持て
ろくにもおそくゆかりある事をうけし残る所の昔
を語るなどするは昔話ならんは又忍ぶべき
ひくやむかしのわかれしいまくいひしる事なれと親類は其恩を
今にとはるべくてまうし親類ハ恩を忘るゝべからずしておぼせたれ

同やうすこしの世なめまつりごとさまよまつくわうき越なく
さめんとる物を考ぎよのよしなし事を書あつめたる
筆は草紙佛家の因とも成菴さら文述きく身の中世上の
うつりかはれる事を思ひ見るたゞし此物語の
ど知らぬ是非の二字を並古今ともなる事をしるとも
堅らう侍るにおぼつかなく漢其御時の習俗を書し侍れ
ハやはしき風俗西土きる事はいまだ此世の多き人のためにも
あらはれたるかくかはる越なくさえんある事を侍る誰書
あまた及びて万葉の時よりも並続み我語れた古今集
まで来て家々にも思ふ人やあらんむかしを見せけるすく
ひとつ縁ぜし世のけしきもあらされとも古語よる家

ちらなきはあやまちもなくなきしとふるてやまされしますの
あらたの塵縁をもひろひ世間の事どもの中に見ひあるに
まかせさるる人生古への言葉を越なかへも考へ試さるを侍し
つらつら心く秀句事をとどめ次第を胸次早語をかりつける
さるひとの侍らん往事にこそいかくにくる鶴鵡の物
いふに似たり信息のあだりもあらに慚愧をあらはさまや
志てはあれなる人たる身にあらぬ次ぐいふことなし翁は智恩
深あらして人たる世安かる身なれば難波江のよしあしも
住かえを古への代をばゆめてらし葉古き言葉に行事を見ひ
捨てくる身そてやさし見えんとちば人のまつ道もかかる宿やを
住かに送らしまた秋の霜の色は眉のうへにかかるなりよ

いにしへは山の端の月よりもさくらふきみは松嶋の紀行よ
りもはかなけれはなけきはりは来世の事をもとかく華
法華のぬれは世の中一ちんもなしただ一息の後なんとはつ
たのみこはかなく此事をおもへばきのふのむかしは後果を
頼むれどあまた越たの夢ぐらしたちもちはしいかちは只
夢よ夜くにとも夢又のせんは夢のうちよ百年も夢のたの
しみはあしひく行るも一夜の夢の世なるし悟り得しこ
そ実る難勝なるべかれと云も清くしくそく終でこそ誠
如きおきまれとも清なるまち長夜の夢は覚るかし浄
けるはあくはされど口号結ふもよしあしの人のうへのいい
ひしかとえ葉にても御無しとなりける船千時 慶長十九

ヨろ吹し寒念坂乃五日記之平